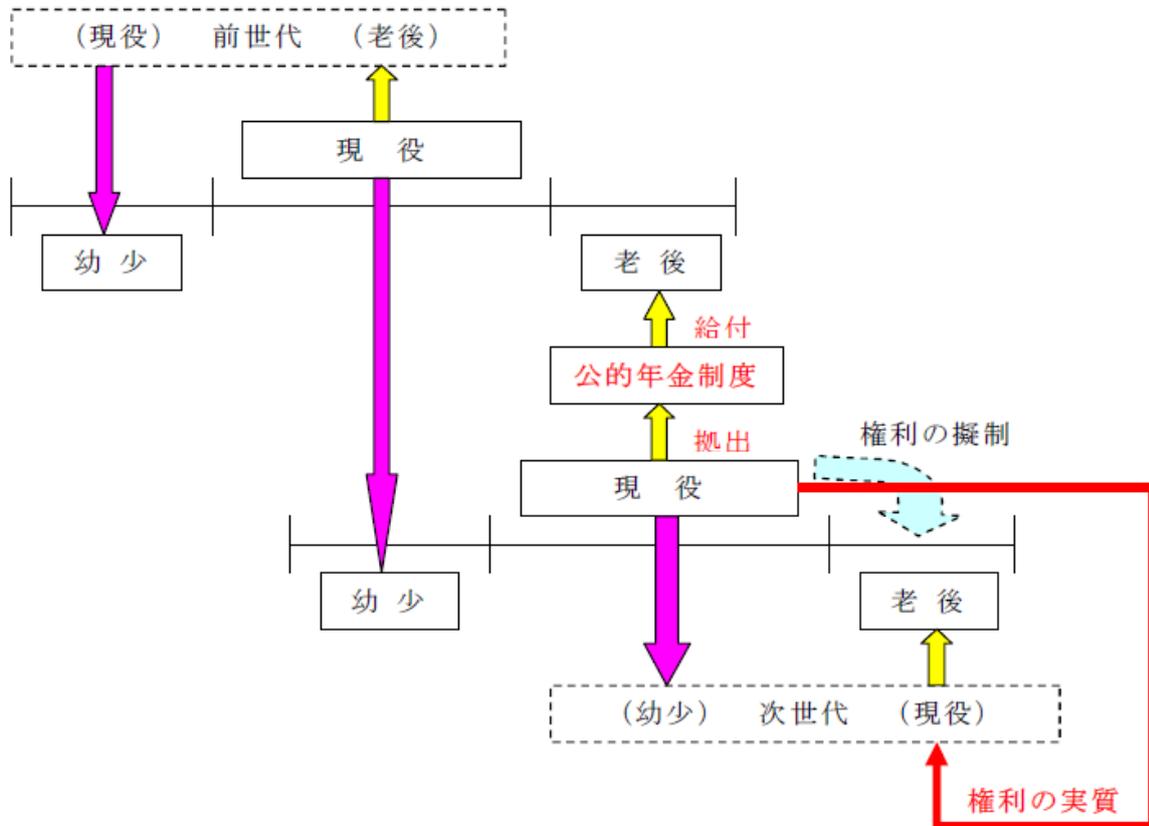




図1：世代間連鎖における公的年金の機能のイメージ



公的年金は、非常に巧みな制度で、保険料を拠出して自身の老後に備えるという体裁をとっていますが、それは「権利の擬制」であり、「権利の実質」は、世代間連鎖の社会化にあります。したがって、本来の公的年金は、積立方式で運営できるものではありません。賦課方式から積立方式に移行する場合の、移行時に「自分の親の世話と自分の老後の準備をする『二重の負担』が生じる」というのも、まったくな的外れの議論なのです。

もっとも、このように巧みな制度であるが故に、「子どもがいなくても老後は年金がある」という誤解を生じさせることになり、年金制度がかえって少子化進展の一因になり得る、というのは皮肉なことと言えるでしょう。

### 3. 少子高齢化が公的年金と私的年金に及ぼす影響

次に、先の②と③について説明しますが、その前に、本来の公的年金とは、全国民を対象とする世代間連鎖に基づく制度である、という認識が重要です。

この観点から、公的年金の起源ともされることの多い職域年金は、強制的で政府が管理するものであっても、本来の公的年金として考えることは、適切ではありません。日本の制度では、基礎年金は本来の公的年金ですが、厚生年金は強制的な企業年金としてとらえる必要があるでしょう。日本の年金を巡る議論の混迷の一因は、この区別ができていないことにあると思います。

少子化は、公的年金は直撃しますが、全国民を対象としない私的年金には、直接には影響しません。一方、高齢化は、公的年金にも私的年金にも影響します。幼少期への所得分配を考える必要のない私的年金

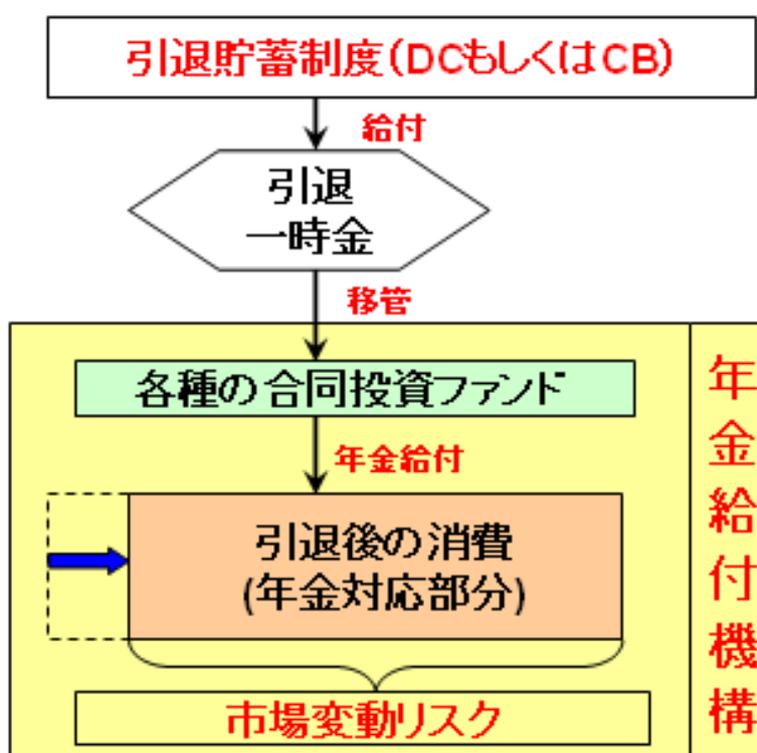
は、結局のところ、現役期の所得を現役期の消費と引退後の消費にどのように振り分けるのか、という仕組みであるということになります。

この私的年金では、給付建て制度から掛金建て制度への切り替えが進んでいますが、それは、長寿化のコスト増に加え、引退した従業員のための年金に対する不透明な投資環境化での追加負担のリスクについて、事業主が、若い従業員や株主の理解を得ることが困難であることが理由でしょう。その観点からして、もはや「事業主が支給する年金の時代は終焉を迎えてきている」という認識を持つ必要があると思います。

#### 4. 「年金給付機構」の検討の必要性

一方で、高齢化の進展の中で、個々人の「年金」に対する必要性は高まっています。これに対する一つの選択肢が、次の「年金給付機構」です。

図2：「年金給付機構」の構造イメージ



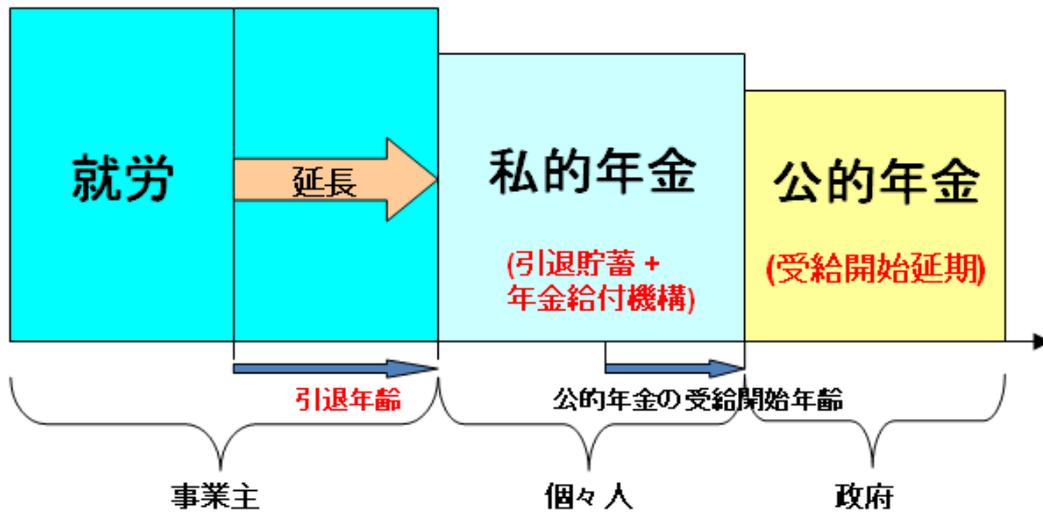
元となる引退貯蓄制度は、掛金建て（DC）でもキャッシュバランス（CB）でもよいでしょう。そうした制度では、一時金での受給が通常ですが、「年金給付機構」があれば、個々人で、集団によるリスク分担という保険機能を利用して、年金給付に転換することができるのです。

日本で広く普及している退職一時金制度は、退職するまでは給付建てです。これに税制優遇を認めれば、DB型の引退貯蓄制度ができることとなり、事業主にとってDC型との選択が可能になるわけです。

#### 5. 少子高齢社会における役割分担

少子高齢化は、これまでの社会構造のあちこちに影響を及ぼします。これに対応するためには、次の図3に示すように、事業主、個々人、政府のそれぞれが、役割や責任を分担する必要があるでしょう。

図3：高齢化社会における望ましい責任分担



この場合の責任分担は、次のようになります。

主体	責任内容
事業主	従業員への「雇用機会」の提供
個々人	「引退貯蓄」を活用した自助努力
政府	国民への「老齢期の所得保障」の提供

## 5. 質疑応答

当日の発表に対して、図3の役割分担で、対応できる個々人は、比較的裕福な人達だけではないのか、と質問がありました。その側面は否定しませんが、図の私的年金には、日本の厚生年金も含まれます。また、事業主からの引退貯蓄への支援も期待されると思います。

それでも、老齢期の貧困だけでなく、子どもや非正規労働者など、幼少期・現役期への対応の強化の必要性も指摘されています。それには、Basic Income までの議論が必要です。そこに到れば、公的年金制度は役割を終えるでしょうが、高齢者の増大の現実の中で、当分の間は、公的年金の重要性は増す一方ではないかと思います。

また、会場のカナダの年金数理人より、カナダでは理解がなかなか得られないが、今後の目指すべき姿は、図3の通りだと思う、とのコメントもありました。

なお、会議の総括の場において、国際アクチュアリー会のTom Terry 会長より、図1の世代間連鎖の重要性を再認識したという点と、高齢者の就労意欲の高い日本は、少子高齢化への対応で一步先を行っている感じであり、今回の日本からの参加者の報告は、非常に良いものだったとのコメントがありました。

以上